

# 熊本・徳永直の会会報

第47号

## 第二十七回 孟宗忌案内

第二十七回孟宗忌は、二月十五日(日)今年も熊本近代文学館と共催でやることになった。開催要領は次のとおりである。

第一部 碑前祭 立田山登山口徳永直文学碑前

10時30分～11時(献酒・献花・メッセージ・経過報告)

第二部 講話と朗読

13時30分～16時 熊本近代文学館正面ロビー

(熊本市水前寺バス停下車江津湖方面へ徒歩五分)

1、講話 「プロレタリア文学期における短編小説」(中村青史)

2、朗読 「カットされない風景」ほか(熊本朗読研究会)

3、フリー討議

第三部 偲ぶ会 水前寺十徳屋

17時～19時 会費五、〇〇〇円

特別展示

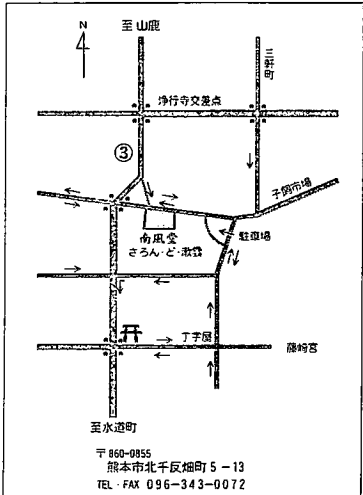
二月三日～二月二十八日

徳永直の特別展示が近代文学館で催されます。

## 読書会へのお誘い

毎月原則として第二土曜日に開いています。場所は徳永直事務所がある熊本市北千反畑町の南風堂さろん・ど・漱雲です。午後三時から五時までです。この読書会は故宮内俊介氏の提案によつたもので、彼が亡くなった翌年から始めたものです。第一回では「太陽のない街」をとり上げました。これは長いので三回ほど続けました。そのあとは昭和十年代の割合短い作品を毎回一作品ずつとり上げてきました。「最初の記憶」「他人の中」「八年制」「冬枯れ」「黎明期」「風」等です。その間に昭和初期のプロレタリア文学期の短いものとり上げました。「麦の芽」「阿蘇山」「眼」「千二百円」等です。また「太陽のない街」以前の習作時代の「馬」「戦争雑記」「あまり者」もとり上げてきました。戦後作品では「敗戦前」「にがい睡」「白道」等です。

常時八名から十名ぐらい参加しています。多くの方々の参加をお待ちしております。会場に入れなくなることを希望しています。入れなくなつたら、別の場所を探しますのので、ご遠慮はいりません。近ごろはテキストを前もって配布するよう心掛けています。テキストのコピー代を五百円いただきます。



〒860-0855  
熊本市北千反畑町5-13  
TEL・FAX 096-343-0072

## 「孟宗忌」開催

馬場 純 二

第二十六回「孟宗忌」が、平成十五年二月十五日、熊本市黒髪四丁目の徳永直文学碑の前で行われ、午後は会場を熊本近代文学館に移し、朗読会が行われました。同館で一月七日から開催されていた「孟宗忌展」に合わせて企画されたもので、中村青史先生の講演「上熊本駅と徳永直」と、熊本朗読研究会による徳永直作品（「風」「蘆花と熊本」他）の朗読会が開催されました。

中村先生は、小説「風」で、JR上熊本駅周辺が舞台となつていくことについて、「徳永の作品は、自己体験を反映させていることが多いが、『風』の主人公「民治」のモデルが徳永であるかどうかははっきりしない。徳永が上熊本駅周辺の運送業者で働いていたという記録はない。」と説明され、徳永文学の更なる研究の必要性を強調されました。また、未だに徳永直全集が刊行されていないことについても、「是非没後五十年にあたる二〇〇八年には刊行できるように動きを盛り上げていきたい」と語られました。

熊本近代文学館のロビーには、朗読会にあわせ一日だけ徳永直の書齋が再現され、愛用の机や長火鉢、書棚、インク消し、万年筆等、徳永直愛好家らの目を楽しませていました。

朗読会には約八十人が参加し、その後、県立図書館三階大研修室でのビデオ上映会「徳永直とその文学」を鑑賞後、中村先生の司会による懇談会が開催されました。



馬場純二撮影



再現された書齋の前で朗読を聞く文学愛好者の  
熊本近代文学館

2003.2.16 熊本日日新聞より

## 戦争は若者を変えた

## 「にがい唾」考

中村 青史

戦争は、徳永直からも愛する者たちを奪い去った。昭和一七年三月二六日、弟吉男がフィリピンのルソン島サンフェルナンドの野戦病院で死に、昭和二〇年六月三日に妻トシヲが空襲下の東京で病死し、同年六月一四日、弟寅雄がこれもフィリピンのネグロス島で戦死した。

徳永直は、小説の戦後第一作として、『新日本文学』創刊号から「妻よねむれ」の連載を始めた。最愛の伴侶であったトシヲへの挽歌「妻よねむれ」は、「お経を読んでやるつもりが、まる三年かかって、やっとおわた」と記されたように昭和三年一〇月一五日の『新日本文学』で終った。その間、妻トシヲの病氣と死を描いた短編「敗戦前」が雑誌『人間』（昭21・6）に発表されている。そして「妻よねむれ」の最終回の少し前、すなわち七月一日の『社会』（三巻七号）に、「にがい唾」が、八月一日の『新潮』に「風のない日」が発表された。戦死した二人の弟のことが素材であった。

「にがい唾」は、第二次大戦で戦死した末弟が、まだ日中戦争時の昭和一五年に除隊帰国し、戦友の遺品を遺家族のもとに届ける話を経系として描かれた作品である。冒頭に昭和一五年九月に、作者が東京新聞の書いたという「弟のこと」という一文の一部分が置かれており、これは徳永の戦時下での諸執筆の言い訳的弁明のようない気もしいではないが、末の弟に対する作者の並々ならぬ愛情の吐露でもあり、何よりも、当時の言論統制下にあつては書けなかつた部分があり、これを引きあいに出すことによつて、明かされていくという筋合いなのである。

「私」は「まだ市電の少年車掌だったころの、あとけない顔など、きのうのようにおぼえている」のだが、今「私」の家の玄関に立つた末弟を見た瞬間「私はぎよつとした。おぼえのある幼な顔はまぎれなくわらっているのに、眼だけはとびかきそうに光っている」のだつた。「汽車がこんだでしょ」と女房がたずねると、「ふーん。いっぱいだったナア、ところが、自分が腰かけるところにや、だアれもこんたい。片っぱあけとくばつてんが、だアれもこんたい。腹がたつけん、ねてきた」と答える。夕飯の時、子供たちにおらつてみせるが、下の方の子たちはこわいとさけんで母親にしがみつく。嫂として古くから末弟を可愛がっていた女房も「怖いわねえ、寅雄さんは」と言い、「あの刀で、九人斬つたんだつて、幸一に鞘をぬいてみせてたわよ」と「私」に言う。寅雄のこわい眼が、そこに原因があるかのようには。

この末弟寅雄は、戦前の「冬枯れ」（昭・9・12『中央公論』）の末弟虎吉と同じモデルである。「冬枯れ」の末弟は次のように描写されている。

「どうしたんだ、今日は？」

はじめて弁当をもつて来た末弟は、いつも嬉しそうにしている顔をよけいニコニコさせて、

「公休たい、月に一度の公休たい」

窓外へ出ると、子供に絵本を読んできかせている虎吉の若々しい声がかきこえてきた。―そこで、のらくら上等兵は……。なんとこの太さだ！何という「働く者」の図太さだ！黄色い朝日のなかに音をたて、崩れていく足許の霜柱をみつめながら、鷺尾は呆然と立ちすくんでしまった！。



2003年度 決算書

2003年1月~12月(単位:円)

収入		支出	
会費納入 52 (含過年度分) 156,000		事務所家賃 (月15,000)	180,000
(一般年会費 3,000)		会報発行 No.46	18,900
" 10 100,000		孟宗忌	6,872
(特別年会費 10,000)		通信費(電話)	46,510
寄 附 191,001		" 切手葉書 他	11,120
前年度繰越 9,215			
		小 計	263,402
		次年度繰越	192,814
合 計 456,216		合 計 456,216	

2004年1月26日

上記に相違ありません。 会計監査

米原 尋子   
西田 光子 

会費納入者(二〇〇三年一月~十二月)  
特別会員

井上 栄次 岩本 上野美恵子 奥山 文幸 金野 文彦  
國米 真市 杉野 健一 高光 協三 中村 青史 丸山 幸子

一般会員  
天草 操 泉 滋 上野 桂子 植村 勝明 浦田 義和  
大我 孝 大友 清子 緒方 明子 小川 裕子 海津 広子

菊川 有臣 吉良 初 熊谷 和信 熊懷 友春 坂本美津子  
佐田 恭子 沢田 博行 島寄 信子 下川 浩哉 平 晋一郎

高田 隆子 高田 睦子 柘植 周子 竹田 中野紀美子 千葉 昌秋  
西川 悦子 寺田 光正 原 中田 幸作 原 秀子 永畑 加久子

福島 明子 正木 憲明 松本 三郎 光岡 達之 宮崎 啓子  
宮崎 静夫 弥上 是子 矢澤 吉邦 八浪 哲郎 山戸かずえ

寄附者  
吉岡 恭子 吉田 精一 米原 尋子 渡辺 秀利 渡辺 布威

大野 正美 上妻 四郎 高光 協三 中村 青史 丸山 幸子  
宮崎 静夫

事務局だより

▽会報はやはり年二回は出したがよさそうである。孟宗忌の報告は大事だから、しかも日時が経ち過ぎてもいけないから。それに年一回だと会費納入を忘れている人も多いようだ。

▽今年の孟宗忌も熊本近代文学館と共催にさせていただきありがたい。▽昨秋会計が悪化したので寄附をお願いした。会報に広告を出すことも考えたい。特別会員も増員したい。従来の特別会員や寄附をしていただいていた会員が次々に減少の傾向である。

熊本・徳永直の会 熊本市北千反畑町五―一三 さろん・ど・漱雲  
〒八六〇―〇八五五 TEL・FAX〇九六―三四三―〇〇七二  
郵便振替 〇一九四〇―二一―一四九八

印刷所 俣昭和印刷 三四四―五二五―二三三四三―三八八六